

椎名麟三全集

四

椎名麟三全集



評論
1

冬樹社

椎名麟三全集14



昭和四十八年十月十五月初版第一刷発行

著者——椎名麟三

発行者——高橋直良

発行所——冬樹社 東京都千代田区神田神保町二——一八

電話東京二六四——〇三四六 振替東京七七五七

印刷所——三容堂印刷株式会社

製本所——一重製本株式会社

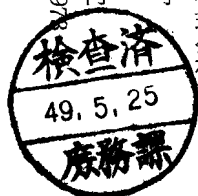
装幀——板折久美子

写真——田沼武能

定価——三〇〇〇円

© Rinzo Shiina 1978

0391-02014-5190



第十四卷目次

I

三つの訴訟状	5
小説論断片	17
戦後文学の意味	25
作中人物其他について	30
「永遠なる序章」について	34
墓地の対話	38
自殺について	48
自己不可能の考察	55
スタヴローギンの現代性	58
蜘蛛の精神	65

無意味よりの快癒	70
疑 惑	77
人間の条件について	80
私の言い分	90
文学的告白	96
踏切にて	104
一つの未来派的考察	109
チェホフの方法	112
二重に理不尽なもの	114
人形のかく小説	121
作家は何のために書くか	125
「異邦人」について	130
作家の自由	145
生きるための読書	148

悪文について	151
映画についての随想	157
スワンソンの演技	162
「生きる」のリアリズム	166
人生への参加	172
文芸時評	177
野間宏「崩解感覚」	181
凱旋門	183
愛と期待	186
森有正「ドストエフスキー覚書」	188
赤岩栄「イエス伝」	191
埴谷雄高「虚空」	193
林芙美子	195
カミュの自由	198

サルトル「文学とは何か」	200
グリーン「不良少年」	202
南博「生きる不安の分析」	204

II

愛について	209
信仰と文学	214
街のクリスマス	219
路傍の種子	227
路傍の種子	227
ものについて	232
小篇二つ	238
文学の限界	243
いまよりしてもはや時なかるべし	248
罪と罰	253

愛について	258
バルトの芸術論	261
未 来	272
滑稽とユーモア	277
ワゴトニイの私語	282
絶対客観のレアリズム	287
復 活	293
悪と自由	322
現代の魔術	338
文学と自由の問題	358
矛盾を生かす者	394
善 魔	399
モラルについて	405
関西紀行	424

行動というもの 429

喜劇について 441

抒情的な余りに抒情的な 446

III

解体する自己 455

過去との断絶 458

運命の年 460

素朴なる賭博者 462

ユートピアについて 464

現代の絶望 469

レットテルについて 472

猫の生活力 474

私の無駄口 476

戦争論 478

死と愛について	480
「噂　話」	486
岡本太郎のこと	489
愛と知性について	492
魔法の指環	497
雨の上高地	499
首　巻　き	504
世相そして人間・政治	505
わたしの描きたい女性	508
私の夫婦観	512
番神様の灯	516
良心について	518
現代青年論	532
下請工場見学記	546

解題		587
解説	 佐古純一郎	579
東京支部長になって		575
九十九里浜		554

評論

1

三つの訴訟状

1 ある未成年者の訴訟状

一体、僕は神を信じているのだろうか。あるいは信じていないのだろうか。もし信じているとすれば、このような問いには意味はない。というのは、信じている者は、このような問いを超えているからだ。しかしもし信じていないとしても、やはりこのような問いには意味はない。何故ならば信じていない者は、このような問いをただ笑うだけだからである。まして、信じていることの、あるいは信じていないことの理由を百も数え上げるなどは、愚劣の極みである。信じる、信じないの問題もその理由を超えているのである。——それにもかかわらず、このような問いが、情ないことにしばしば僕の心のなかに起るといふことはどうしてであろうか。

それには二つの原因がある。一つは神自身の不確かさのためであり、一つは僕自身の不確かさのせいなのだ。僕の自己を奪い得るものは、すべてこのような不確かさを、厳密に言えば確かでありながら不確かであ

るといふことを、その本質としていふのである。神、世界、幸福、愛などというものがそうである。これらは、それを信じ得るものには存在し、信じ得ないものには存在しないのだ。ところが、僕は、神を信じているようでもあり、信じていないようにも思われる。これは僕自身の存在の本質としての不確かさに自己を奪われているからである。全く確かでありながら不確かであるようなものは、とかく人間の関心をひき、やがてその関心は好奇心にまでたかまって遂にはその好奇心のなかに自己を失うのである。そのとき人々は、それを信じたという。あるいは愛したでもいい。というのは、信じるということ、愛するということは同意語であるからだ。言いかえれば、確かでありながら不確かであるものは、僕たちの心に不安を起させるのだ。そして僕たちは不安の余り信じることへ追い込まれるのだ。

不安は存在の根源的な気分だとハイデッガーはいう。しかし信仰は神に対する存在の根源的な気分なのである。端的に言えば信仰は気分としてあるのだ。だから信仰ほど不安定なものはないと言えるのだ。それは動揺に満ちている。しかもそれは常に失われ、失われるのである。全く信仰は失われることによって逆に確かめ得るといふ、悲劇的なものに属するのである。というのは信仰している者は、すべて神を見た者ということは出来ないのだ。ヨブのような完全な信仰者といえども、神を見たのは恐しい苦難の後であつた。人生における蹉跌が、神も仏もないものかというあの嘆きに導くのである。しかしその嘆きのなかに、ふいに逆に神が確かめられているのである。一般に日常には、人々は神を信じているような気分ではある。彼等にとっては神を見ることは出来ない。だから彼等は神の言葉を見るだけなのである。

気分は、それが暗いものであるにしろ明るいものであるにしろ、生きている実感である。それが人間性の根源なのだ。もしその人の信仰がもはや気分ではなく、常に確乎として神が眼の前にあるとするならば、彼の一切の人間性は死んでいなければならないのだ。しかしそのような人は、もはや信仰者ということとは出来